

# 『現觀莊嚴論明義釈の注釈、 真髓莊嚴』和訳 (1)

兵 藤 一 夫

## はじめに

Maitreya (弥勒) の作と伝えられる『現觀莊嚴論』(*Abhisamayālamkāra*) は、Ārya Vimuktisena を初め、Haribhadra, Ratnākaraśānti などにより 21 の注釈が書かれたとされており、<sup>①</sup> インドに於いて重要視された論書の一つである。このように多くの注釈が書かれたことは、『現觀莊嚴論』自体が簡潔で内容項目を列挙した如きの偈頌体であるため注釈を必要としたことを考慮に入れるとしても、8世紀から11世紀にかけてインドに於いて重要な論書として学習されていたことを示しているであろう。『現觀莊嚴論』に関しては、これまで E. Obermiller, 荻原雲来, E. Conze, 真野龍海、最近では天野宏英、磯田熙文などの先学達の勝れた業績があり、それらによってこの論書の重要性や内容・性格などがかなりの部分明らかになってきている。しかしながら、著者問題も含めてこの論書がインド仏教思想史の上でこれまで十分な説明がなされているとはいえない。しかも、現存の注釈は未だなお簡潔であり、全体的に十分に理解することが困難な箇所も少なくない。特に『現觀莊嚴論』の規範的注釈である Haribhadra の『現觀莊嚴論明義釈』(*Abhisamayālamkāravivṛtti-sphuṭārtha*, 『小註』) に関してこのことが妥当するであろう。そのような状況の中で、チベットに伝わる『現觀莊嚴論』の解釈を研究することは、その学的伝統が Haribhadra の注釈、特に『小註』の伝統を正しく受けているように思われることから、それらの研究がチベットの仏教としてだけでなくインドにおける『現觀莊嚴論』の研究にも資することは大きいであろう。<sup>③</sup>

さて周知のように、チベットに於いては、『現観莊嚴論』を般若經の学習の中心テキストとする学的伝統が保持されている。特にゲルー派では、五つの主要な学習項目(中観学・般若学・論理学・律学・アビダルマ学)の中の一つの修行論の項目である般若学の中心テキストとして重視されている。チベットにおける『現観莊嚴論』の学習は Haribhadra の『小註』を基礎にしたものである。そして後述するように、いくつかの学的伝統を経て、rGyal tshab Dar ma rin chen の著した Haribhadra の『小註』に対する注釈である *rNam bsad sn̄in po rgyan* (ab. *rNrG*.『注釈, 真髓莊嚴』)によってその伝統が確定するのである。従って、この *rNrG*. が『現観莊嚴論』の研究に対して有している価値は非常に大きいものであるが、なにぶんにもチベット仏教の伝統を背景にした相当膨大なテキストであるため、その本格的な研究は容易ではない。しかし、即座にその全貌がわからないまでも、これを少しずつでも和訳していくことは、『現観莊嚴論』の研究に対してその意義は少なくないであろう。幸いにも、筆者は、ゲルー派の伝統を正しく受け継いでいるツルティムケサン(白館戒雲)氏のご助力を受けるという幸運を得たので、師の勧めにも勇気を得て、それを和訳してみようと決意したのである。それに先立って、チベットに於ける『現観莊嚴論』の歴史を概観しておきたい。

## 1 チベットに於ける『現観莊嚴論』の歴史<sup>⑤</sup>

### (1) 前期伝播期(8—9世紀)

この時期は、大翻訳官 dPal brtsegs が Haribhadra の『小註』(Pek. No. 5191)などの般若関係のテキストをチベット語に翻訳しているが<sup>⑥</sup>、特に『現観莊嚴論』が学的伝統をもって学習された形跡は見られないように思われる。ただ、*Deb ther sn̄on po* (ab. *DsÑ.*)によれば、<sup>⑦</sup>このときの解釈の伝統がカム地方に残ったとされている。

### (2) 後期伝播期(10世紀以降)

(i) まず、大翻訳官 Rin chen bzañ po が Haribhadra の『現観莊嚴論光明』(*Abhisamayālamkāralokā*, 『大註』, Pek. No. 5189)などを初めてチベット

語に翻訳すると共にそれらを教えたことは間違いないであろうが、彼自身が作った注釈はないと思われる。DsÑ. によれば<sup>⑧</sup>、Rin chen bzañ po は以前自分が翻訳した *brGyad ston pa, Ñi khri snan ba* (Pek. No. 5185), *brGyad ston 'grel chen* (Pek. No. 5189) などの校訂を Atiśa をお願いした、とされている。

(ii) 後期伝播期において重要な役割を果たした Atiśa (Jo bo rje, 982-1054) は般若経や『現観莊嚴論』に関しても影響を与えている。DsÑ. には、彼がネータンで多くの聴衆に『現観莊嚴論』を要約して説いたが、人々がそれに満足しなかったため彼はさらに詳しい解説をした、これがカムの *Phya dar ston pa* によって書き留められて「般若学に対するカムの解釈法」(*phar phyin Khams lugs ma*) として知られている、と述べられている。ほぼ同じことが、Akhu rin po che (Śes rsab rgya mtsho, 1803-1875) の *dPe rgyun dkon pa'i tho yig* (ab. *ATH*) にも、Atiśa が初めて 'Brom ston pa (1004-1064) に教えて、『八千頌般若経』と『現観莊嚴論』の注釈を作ったものをカムの *Phyag dar ston pa* が書き留めたものが、「般若学に対するカムの解釈法」(*phar phyin Khams lugs*) と呼ばれる、と述べられている。

(以後の学的伝統の歴史は一応宗派ごとにまとめるが、チベットの宗派意識は弱く、仏教の学習には宗派を越えて自由に師を選んでいたことを考慮すると、この分類は全く便宜的なものであることを断っておきたい。)

### (iii) カダム派

(a) チベットに於いて般若学、即ち『現観莊嚴論』の学的伝統を初めて確立したのは大翻訳官 rNog Blo Idan śes rab (1059-1109) である。彼は自分の叔父の Legs pa'i śes rab が作ったサンブ寺で出家した。それから叔父の教えのとおり、中央インドとカシミールなどで学び、35歳の時にチベットに戻り、カンギュール・テンギュールを十万頌余り翻訳したのである。そのうち『現観莊嚴論』に関しては、本偈 (Pek. No. 5184) を翻訳し、Ārya Vimuktisena の注釈 (Pek. No. 5185), Haribhadra の『大註』『小註』などを校訂している。また *ATH*. によれば<sup>⑩</sup>、彼は大・小の *Phar phyin tikā* を書

き、それがチベットの般若・現観の注釈の最初である、とされている。

(b) Blo ldan śes rab の一番勝れた弟子である Gro luñ pa (Blo gros 'byun gnas) は師のすべての教えを大切に、師の『小註』に対する注釈に依拠して注釈を作った。彼が年を取ったとき、Phya pa が彼から学んで『小註』に対する大部の注釈を作った。Phya pa に従う人達の伝統は 'Bri Śes rab 'bar や Ar Byañ chub ye śes の解釈法とは異なっている、と言われている<sup>12)</sup>。

(c) マーの翻訳官の一番勝れた弟子である 'Bri Śes rab 'bar は般若経と『現観莊嚴論』に対して詳しい解説をした。彼が法を説くときは天人達も降りてきたと言われている。彼の解釈はカム地方に伝えられていた前期伝播期の解釈方法から出たものである。

'Bri Śes rab 'bar の多くの弟子達の中で彼の解釈の伝統を受け継いでいる主な者は、Ar Byañ chub ye śes である。彼は年を取るまで教え、般若経と『現観莊嚴論』に対して多くの注釈を作った。これ以後、チベットにおける般若学の基本テキストの伝統的な解釈はほとんど 'Bri と Ar の二人の解釈に基づいているのである<sup>13)</sup>。Ath. によれば、'Bri Śes rab 'bar は *Nī khri'i 'grel pa* (『二万五千頌般若経』の注釈) と *Phar tīkā* と *sDud pa'i 'grel pa* (『宝徳集頌般若経』の注釈) を書き、Ar Byañ chub ye śes は *Phar phyin, mDo sdud pa, Śer snān* の注釈を書いたとされている。

また、Khu Ser brtson (1011-1075) は 'Bri Śes rab 'bar から聞いたが、主に Ar Byañ chub ye śes のやり方を採用して、『現観莊嚴論』とその注釈に対して大・中・小の注釈を作った。Ath. によれば、彼は『現観莊嚴論』に対する詳細・中・要約の三つの注釈を書いたとされている。

また、sKar chuñ rin mo として知られる gShon nu tshul khriims も Ar の下で学んで、『現観莊嚴論』と『小註』と『宝徳集頌般若経』などに対する多くの注釈を作った。Ath. によれば、彼は *rGyan rīsa 'grel gyi nam bśad, mDo sdud pa'i 'grel pa* を書いたとされている。

Khu Ser brtson と gShon nu tshul khriims の二人の弟子である Shañ gYe ba sMon lam tshul khriims はネタンなどの多くの寺で過ごし、『小註』

に対する大部な注釈などを作り、多大の貢献をなした。そして彼の弟子の dBañ phyug rgyal po は般若・現観に関して非常に詳しい注釈を作った。ATH. によれば、sMon lam tshul khriims は 'Grel pa don gsal gyi 'grel bsad を書き、彼の弟子の dBañ phyug rgyal po は *Phar phyin tīkā chen* を書いたとされる。

この sMon lam tshul khriims の伝統は弟子の gÑal pa Shig po, その弟子の rGya 'tshañ Ru ba, それから Chu mig pa Señ ge dpal, lHo brag pa, Tshad ma'i skyes bu, Bu ston Rin po che, Dharmasrī, Ru mtshams pa bSod nams señ ge, sPo bo Yon tan señ ge まで相続し、Yon tan señ ge が *DsÑ.* の著者である gShon nu dpal の師である Śākya dbañ phyug に解説し、gShon nu dpal に受け継がれてきた、と述べられている。ATH. によれば、Bu ston の師である 'Jam skya nam mkha' dpal ldan の *Phar tīkā*, Bu ston の *Phar phyin tīkā chun* (Toh. No. 5173, *Phar phyin 'grel chen lun gi sñe ma*), 彼の弟子の Chos dpal bzañ po の *mÑon rtogs rgyan gyi rnam bsad*, 翻訳官 Shva lu Chos skyon bzañ po の *mÑon rtogs rgyan gyi tīkā*, Shva lu Rin chen bsod nams 'phel の *Phar phyin sbyor tīkā mkhas pa dga' byed, Don bdun cu'i sa mtshams, Phar phyin thal phren*, sKyo ston Rig 'dsin rgyal po の *Phar phyin rnam bsad ñi ma'i 'od zer*, mGos lo gShon nu dpal の大・小の *Phar phyin rnam bsad*, Bo doñ Phyogs las rnam gyal の *Phar phyin dka' 'grel chen mo, Phar phyin bsdus pa* などがあったことが知られる。

(iv) サキヤ派

(a) この派の般若学の伝統は、gYag phrug Sañs rgyas dpal (1350?-1414) に始まると考えられる。*DsÑ.* によれば、彼は本当はツェタン派の Byañ chub rin chen の息子であるが、その者に仕えていた gYag yu の息子 (gYag phrug) と呼ばれている。彼の学問の基礎はサンブ寺である。彼はそこで Bu ston の『現観莊嚴論』の注釈を学び、カンギュール・テンギュールを暗記することで彼に並ぶ者はいなかった。彼はサキヤ派のガーデン寺の座主とな

り、中央チベットのあちこちに般若学の伝統を作ったので、般若・現観は非常によく広まった。また彼はそれらに関して多くの注釈を書いたが、その中の一つが *Phar t̄ikā ldi lir dpar bskrun byas* (Ngawang Topgyal, New Delhi, 1973) として残っている。<sup>16</sup> *ATh.* によれば、彼は *Phar phyin dka' 'grel*, *Phar phyin bsdus don* を書いたとされている。

彼の最愛の弟子である Ron ston sMra ba'i señ ge chen mo (1367-1451) はギャルモロンからサンブ寺にやっけてきて、20歳の時には大論書に注釈を書くことが出来るほどの大学者になった。彼は詳しい解説をなしたので学者の弟子達が多く輩出した。また、彼は『小註』や『十万頌般若経』にも大部の注釈を作るなどして、後の学的伝統を盛んにすることに大いに貢献をなしたのである。(また彼は Tsoñ kha pa の *gSer phreñ* を批判したが、その意見に対する反論が Dar ma rin chen の *rNṛG.* に見られる) この Ron ston の解釈を、Sañs rgyas 'phel, rGyal ba mchog などが受け継ぎ、gYag phrug の伝統を確立したのである。<sup>17</sup>

(b) gYag phrug と共にもう一人の重要な人物は Ña dpon Kun dga' dpal である。*ATh.* によれば、<sup>18</sup> 彼は *Phar t̄ikā yid kyi mun sel* を書いているが、それがインドから出版されている (*bStan bcos mñon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dan bcas pa'i rgyas 'grel bsad sbyar yid kyi mun sel*, New Delhi, 1978)。DsÑ. には、<sup>19</sup> Red mda' pa は Ña dpon について般若学を完全に学んだ後に弟子達の願いによって、『小註』に対する注釈を作ったと述べられている。*ATh.* によれば、彼は *Phar phyin gyi t̄ikā ni ma'i 'od zer* を書いたとされている。

その他に、<sup>20</sup> Sañs rgyas 'phel の弟子の Go rams pa bSod nams señ ge (1393-1489) は『現観莊嚴論』の注釈を伴った *Yum don rab gsal* (Tokyo, 1969) と『現観莊嚴論』の前後の関係と難しいところを分析した *sBas don zab mo'i gter gyi kha 'byed*, 'Grel pa don gsal ñag 'don と『現観莊嚴論』の定義語の支分を詳しく解説した *sBas don rab gsal* などを作り、大学者 Śākya mchog ldan (1428-1508) は般若経の難語釈である *bShed tshul rgya*

*mtsho'i rlabs phren* などを書いた。翻訳官 *sTag tshan sGra ba śes rab rin chen* (1405-?) は *Phar ṭikā* を、*bSod nams rgyalmtshan* (1312-1375) は *mÑon rtogs rgyan gyi rnam bśad* と小さな注釈を、*Ñag dbañ chos grags* (1572-1641) は *Phar phyin spyi don kun mkhen dgoñs gsal* などを作った。これらの中で、*Go rams pa* の説いたものが一番重要で、それはサキャ派の教科書となっている。

(v) ゲルー派 (新カダム派)

*Tsoñ kha pa* (*Blo bzan grags pa*, 1357-1419) に始まるゲルー派は新カダム派とも呼ばれ、宗派としてはカダム派の流れを汲むが、先にも言及したように、その学的伝統はそれぞれがどの師についたかによって左右される。*Tsoñ kha pa* は般若学などをサキャ派の *Red mda' pa* から学んでいる。*DsÑ.* によれば、<sup>①</sup>彼は *Red mda' pa* から『小註』の注釈を学んで、後に、遊行に出る前に *Legs bśad gser phren* を書いたが、すぐに遊行に出たため彼の解釈の伝統を受けた者は余りいない。後に、*Dar ma rin chen* が『小註』の注釈を作ったが、それは今まで他の人達に大いに役立っている、と述べられている。

チベットに於ける『現観莊嚴論』の学的伝統を確定し、それ以後の学習の所依されるのは、*rGyal tshab Dar ma rin chen* (1364-1432) である。彼は初め *Red mda' pa* の弟子であったが、後に *Tsoñ kha pa* の弟子にもなった。*'Jam dbyañs bśad pa* は *sKabs dan po'i mtha' dpyod* の中で、*Dar ma rin chen* が *Tsoñ kha pa* の *gSer phren* を学び後に *Tsoñ kha pa* に般若学を聞いて正確な意味と実践の仕方を伝授されてノートを作ったのが *rNrG.* である、と言っているが、昔の学者も言っているように、*Tsoñ kha pa* が *Dar ma rin chen* に『現観莊嚴論』の注釈を教えたことがあっても、この論書はその時のノートではなく *Dar ma rin chen* が自分で書いたものである。<sup>②</sup> また彼とほぼ同時代で *DsÑ.* の著者である *'Gos* の翻訳官 *gShon nu dpal* (1392-1481) なども、直前に紹介したように、*Dar ma rin chen* が『小註』に対する注釈 *rNrG.* を作ってからは *Tsoñ kha pa* の *gSer phren* よ

りも遙に多くの人達に役立っていることを示唆している。

(vi) その他

カギユ派とニソマ派などはこの般若学の伝統が豊かでないので、それを簡潔に述べておく。Dol po pa の *mÑon rtogs rgyan gyi mam bsad*, Karma pa Mi bskyod rdo rje (1507-1550) の *Phar phyin ñikā chen*, 'Brug pa Padma dkar po (1527-1592) の『現觀莊嚴論』の注釈 *rJe btsun byams pa'i shal lun*, 'Ju mi pham (1846-1912) の *Ser phyin mñon rtogs rgyan gyi mchan 'grel Pundarika'i do sal* などがあるだけである。<sup>23</sup>

## 2 rGyal tshab Dar ma rin chen の *rNrG.* について

前節でも述べたように、Dar ma rin chen の *rNrG.* は Haribhadra の『小註』を中心としてきたチベットの般若学の伝統の中で、一つの到達点となっている。そして以後の学的伝統はこれを所依としているのである。本書のサルナート版の序論には次のように書かれている。この注釈は、一般にはチベットの『現觀莊嚴論』のすべての注釈とインドの一般の注釈、主に Ārya Vimuktisena と Haribhadra の注釈に依拠して、般若経と『現觀莊嚴論』の内容である一切相智に至る道の次第を決してしているのである。

*rNrG.* は『小註』に対する非常に大部で詳細な注釈であり、大谷本 (No. 10146) で 354 葉にのぼる。それは、伝統の中で出来上がってきた詳細な科文によって、『小註』の内容を明確にし、相互の関連性を明らかにしている。また、チベットにおける解釈上の異論を紹介し、それらを批判している。また、注釈の仕方は、『小註』の文章の言葉を補足したり、自らの文章の中に『小註』の言葉を散りばめたりして、『小註』全体の言葉を何らかの形で注釈している。これらの解釈は、概してインドの伝統を受けていると思われるが、しかし随所にチベットの要素が見られるようである。従って、本書によって『現觀莊嚴論』を研究する場合、インドの注釈との違いの有無を常に念頭に置かなければならない。

次に、本注釈書の現存する版の主なものを以下に列挙しておく。



- (1) *rNam bsad sñiñ po rgyan*, Otani No. 10146, (Kha. 1-354)
- (2) *Śes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ñag gi bstan bcos mñon par rtogs pa'i rgyan gyi 'grel ba don gsal ba'i rNam bsad sñiñ po'i rgyan*, Toh. No. 5433, (Kha. 1-346)
- (3) *Phar phyin rNam bsad sñiñ po rgyan*, Gelugpa Student's Welfare Committee, Central institute of Higher Tibetan Studies, Sarnath, 1980.

〈注記〉

- ① 拙論『現觀莊嚴論』の注釈文献について(『真宗総合研究所紀要』No.2, 1984)参照。
- ② 本論書に関しては、当拙論の和訳部分の注①を参照のこと。
- ③ ただこのためには、*rNrG.* からチベットの要素を取り除く必要がある。
- ④ 小川一乗教授からも勧められ、翻訳に際しても多大のご教示を得た。
- ⑤ この歴史は、'Gos lo tsā ba gShon nu dpal, *Deb ther sñon po* (Śata-Piṭaka Series, Vol. 212, New Delhi, 1976) と A khu rin po che Śes rab rgya mtsho, *dPe rgyun dkon pa 'ga 'shig gi tho yig* (Śata-Piṭaka Series, Vol. 30, New Delhi, 1963; repr. *Materials for A History of Tibetan Literature*, Kyoto, 1981) に基づいているが、Tshul khriims skal bzañ (白館戒雲), *Byams chos bskiyar shib dran ñes mdses rgyan* (Kathmandu, 1984) にも多くを依存している。
- ⑥ デンカルマ目録 No. 517 (芳村, M. Lalou 共に) が『小註』に相当すると思われる。(Pek. No. 5851, Cho. 366b3-6) またプトン目録 No. 536 (西岡祖秀「プトン仏教史目録部索引Ⅱ」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』No. 4, 1980)
- ⑦ *DsÑ.* op. cit., Cha. 2b2-3.
- ⑧ *DsÑ.* op. cit., Ca. 4b6-7.
- ⑨ *DsÑ.* op. cit., Ca. 8b4-6.
- ⑩ *ATh.* op. cit., pp. 528-529.
- ⑪ *ATh.* op. cit., p. 528.
- ⑫ *DsÑ.* op. cit., Cha. 3a3-7.
- ⑬ 以下、この節の記述は、*DsÑ.* op. cit., Cha. 2b2-3a3. による。
- ⑭ *ATh.* op. cit., p. 529. 以下のこの節の *ATh.* も同様である。
- ⑮ *DsÑ.* op. cit., Cha. 6b3-5.
- ⑯ *ATh.* op. cit., p. 529.
- ⑰ *DsÑ.* op. cit., Cha. 6b5-7a2.
- ⑱ *ATh.* op. cit., p. 529.

- ⑱ *DsÑ.* op. cit., Cha. 7a3-4.  
 ⑲ Tshul khriṃs skal bzañ, op. cit., pp. 285-286.  
 ⑳ *DsÑ.* op. cit., Cha. 7a4-5.  
 ㉑ Tshul khriṃs skal bzañ, op. cit., p. 287.  
 ㉒ Tshul khriṃs skal bzañ, op. cit., p. 286.

『注釈，真髓莊嚴』和訳

〔序 論〕

〈1b, p. 1〉<sup>\*</sup> 慈悲を有した最高の尊者達の御足にいかなるときも恭しく礼拝します。

『般若波羅蜜の解説の論である現観莊嚴論明義釈 (*Abhisamayālamkāra-nāma-prajñāpāramitopadeśasāstra-vṛtti-sphūṭārthā*)<sup>①</sup>』の『注釈，真髓莊嚴』というもの。

多数の最高の賢者達が歩む道である波羅蜜の最高の正しい方軌を親切にも明らかにしてくださったかの尊者ラマに礼拝します。

完全な牟尼の教説の道の要点があるがままにご覧になり自在になって、  
 [それを] 有情に対して慈悲によってお説きになったラマの御足に頭で礼拝します。

深遠で広大な、あるがままのどんなもの<sup>②</sup> (*ji lta ji sñed*) 意味も残りなくご覧になって、慈悲の権化になったマイトレーヤ (弥勒) や 〈2b〉 マンジュシュリー (文殊) [菩薩] を初めとする [法] の伝統に属するラマ達に礼拝します。前後の確定した順序の関係と本偈と注釈の関係が [『現観莊嚴論』研究の] 中心であるとする者には、この [『現観莊嚴論』の] 方軌の一部分さえも理解しているのが見られないから、このテキストを分析 (注釈) することに対して [私, タルマリンチェンには] 少しの喜びが生じる。

無垢な合理の眼を持たず、最高の善知識である導き手を離れる者は、一切知者である勝者の町に入ろうと望んでも、誤った道を通して荒涼とした所へ入ってしまう。

この深遠な道は非常に証得するのが困難なのであろうか。自分自身のすべ

ての生存において〔この論書に〕習熟するために、そして本尊<sup>③</sup>やラマの恩恵に感謝を示すために注釈をするので、〔心を〕集中して敬意をもって聞いてください。

さてこの世で、自分で非常に得ることが難しく、得たときには非常に大きな利益のある好ましい境涯と条件の円満 (dal 'byor, kṣāṇa-sampad)<sup>④</sup> を得ている〈p. 2〉のに、この世間の長老達の考え方よりも勝れた、来世以降の暫時と究極の人間の望む目的の根本を正しく建立せずして、〈2b〉この生涯だけの財と名誉などのために努力することは、実のない藁を持ち上げ〔て選別する〕ことと同じであり、〔それは〕動物の行為から脱却していないと知って、好ましい境涯と条件の円満に対してその本質を正しく理解することに努力すべきである。<sup>⑤</sup>

さて、一切の有情に対して一律に恩恵を施す仏陀世尊が法輪を三つの順序で転じてから、〔過去・未来・現在の〕三時の聖者達が行き〔これから〕付き従って行くであろう道と果を判断基準となす方々が広大な聖教と理論の集まりによって決択された見解に随順して、それらの意味を証得して、宝である三学によって規範のとおり実践することによるほかには聖者の御意にかなう最高の方法はないと知られる。

さて、アーチャールヤ聖アサンガという者は、昔、多くの勝者達に対して特に勝れた所作をなして広大な善根を生じさせ、今また、仏陀と菩薩の力添えにより、理解する智力は他者よりも卓越しており、牟尼仏陀世尊の教説を担うという願いを正しく成就している。了義未了義の經典の密意を完全に注釈すると予言されている彼は、後代の所化達が大海のごとくに見られる大衆の諸蔵に対して旅人が方向〈3a〉に迷ったごとくになって前後の言葉の関係すらも理解するのが困難な〈p. 3〉とき、最高の深遠な意味を理解することは尚更〔困難〕であるとお察しになり、また、自らも如来の一切の秘密の中に〔自分に〕隠されている〔ことがある〕と知って、牟尼のお説きになった一切の秘密を秘密としない眼をお持ちになっているかのマイトレーヤを御意を得て、〔自分の〕望みのままの目的を成就したいと意図して〔ある〕行を行

じて、[マイトレーヤの] お顔を目のあたりにご覧になって、世尊(マイトレーヤのこと)の神通によって兜率天に至り、法をお聞きになることで一切の教説の密意を全く完全に理解されたのでした。[そしてマイトレーヤは] ジャンブ州の後代の所化達を撰取するために最高の法の贈り物を与えられた。それは二つの分別論と二つの莊嚴論と『究竟一乗宝性論』の五つの大論書である<sup>⑦</sup>。

さて、一般的に世尊の教説において未了義と了義を区別することに関して二種の方軌が説かれている。『無尽意経』と『三昧王経』に説かれているものなどと、『解深密経』に説かれているものとはである。第一のものは、一切法は自相として成立するというだけでは空であると説くのが了義であり、人(プタガラ)や蘊など多くの言葉や文字によって説くのが未了義であると語る。後者の經典は、妄想された相(遍計所執性)は自相としては成立せず<3b>、他による相(依他起性)と完成された相(円成実性)は自相として成立すると語り、一切は一方的に自相としては成立しないと説くものと一方的に成立すると説くものは未了義であり、自相として成立するものと成立しないものの<p.4>境界をはっきり分けて説くのが了義であると語る。前者の經典に随順して救護者ナーガールジュナは未了義と了義を区別する車の轍を正しく付けることによって、二番目の經典(『解深密経』)は未了義であることを自動的に証明された。

一方、アーチャールヤ聖アサンガは、二つの分別論と『大乘莊嚴經論』に随順して後者の經典の未了義と了義の区別の仕方に基づいて、主として唯識の車の轍を正しくつけて小乗の諸蔵の密意をも注釈された。その中、[彼は]『法法性分別論』では、所取能取として顕現し輪廻を成立させる基盤であり諦として成立する依他起を「法」と[説き]、そして所縁となして修することによって解脱を獲得するよりどころであり別な実体の所取能取としては空であるものを「法性」と説き、『中辺分別論』では、諦として成立する二<sup>⑧</sup>[取]の顕現を根本として三相を分類し、不共乘(大乘)の教義と道と果を確立した。『大乘莊嚴經論』では、二[取]の顕現が諦として成立することを否定せずに大乘の<4a>種姓を目覚めさせる仕方を初めとして、菩薩自身が

悟りを次第に勝れたものにしていく仕方と〔菩薩以外の〕他の所化を摂取する方便を詳しく決択された。〔彼は〕これら三つのテキストによって所化の意向に関係した勝義を説かれたが、一切法は自性として成立することでは空であるという勝義は明らかにされなかった。これらの三つの論書〈p. 5〉に従い『解深密経』の未了義と了義を区別する仕方に賛成してアーチャールヤ（アサンガ）は『瑜伽論』と二種の概要書<sup>⑨</sup>などにて唯識の車の轍を正しくつけられた。また、小乗のある歳で、犀のごとき独覚と大乘の種姓の者は資糧道として〔それぞれ〕百劫と三無数劫の間資糧を積み、煖位以上の加行道を一座で通過する仕方が説かれることも、『声聞地』にて語られた<sup>⑩</sup>。

『究竟一乘宝性論』では、一切は諦としては空であり、一切の戲論を離れているという勝義諦は、唯識の方軌を修することによって〔心身〕相続が熟した者たちには後時に説かれるべきであり、大乘の種姓の利根の者たちには最初に説かれるべきであって、声聞の悟りと独覚の悟りを獲得する者も必ず証得しなければならない道の対象であるが、〔このような勝義諦である〕詳細（『十万頌般若経』）と中（『二万五千頌般若経』）と〈4b〉要約（『八千頌般若経』）の三つの経典と『如来藏経』は区別がないことが明らかであることを説明している。まさにそのことをアーチャールヤ・アサンガはそれの注釈の中で密意のままを明らかにしているので、第一の未了義と了義を区別する仕方に関した車の轍をつけた救護者ナーガールジュナとは異っていると考えるべきではない。彼自身（ナーガールジュナ）に従っているからである。アーチャールヤ（アサンガ）は『究竟一乘宝性論』を唯識の方軌にて注釈しているという主張は認められない。〔そのことは〕この注釈で究竟一乘を証明して微細な空性が詳しく決択されていることと全く矛盾するからである<sup>⑪</sup>。

この『現観莊嚴論』では〈p. 6〉空性の究竟の見解が繰り返し説かれているが、決択されるべき根本的なことは三種姓の現観の次第、即ち自性の決択と数の決択と順序の決択の三つに関して実践するままのあり方、即ち詳細と中と要約の三つの般若経中の隠れた意味を明らかに説くことである<sup>⑫</sup>。

（\* 訳文中の葉数は大谷本、頁数は Sarnath 本を示す）

（未完）

〈注記〉

① 本論書はハリバドラの『小註』ともよばれる。テキストの版として、

(i) Skt. ed.

天野宏英：「現観莊嚴論釈の梵本写本(1)」(『比治山女子短期大学紀要』No. 17, 1983) (第8, 9章の部分)

「現観莊嚴論釈の梵本写本(2)」(『島根大学教育学部紀要』No. 19, 1985) (第5, 6, 7章の部分)

「現観莊嚴論釈の梵本写本(3)」(『島根大学教育学部紀要』No. 20, 1986) (第4章の部分)

「現観莊嚴論釈の梵本写本(4)」(『島根大学教育学部紀要』No. 21, 1987) (第2, 3章の一部分)

「現観莊嚴論釈の梵本写本(5)」(『島根大学教育学部紀要』No. 22-2, 1988) (第1章の部分)

「現観莊嚴論釈の梵本写本(6)」(『島根大学教育学部紀要』No. 23-1, 1989) (序章の部分)

(ii) Tib. ed.

Pek. No. 5191 (Ja. 93a6-161a7) (影印版第88巻)

Toh. No. 3793 (Ja. 78b1-140a7)

H. Amano ed., *A Study on the Abhisamayālaṅkāra-kārikāsāstravyūtti* (Tokyo, 1975) (これは『大註 (Āloka)』の平行文 (Skt.) を含む)

Ramasankaratripathi ed., *Abhisamayālaṅkāravṛttiḥ Sphūṭārthā* (Bibliotheca Indo-Tibetica, No. 2, Sarnatha, 1977) (これは還元 Skt. を含む)

和訳研究としては、真野龍海『現観莊嚴論の研究』(山喜房, 1972) などがある。

② 「るがまま (ji lta ba)」とは法のあるがまま (如所有) ということであり、「深遠 (甚深, zab pa)」と相応する。「どんなものも (ji sned yod pa)」とは存在する限りの (尽所有) ということであり、「広大 (rgya che)」と相応する。小谷信千代「ラムリムチェンモ (止の章) の和訳(2)」(『仏教学セミナー』No. 49, p. 27) 参照。

③ 本尊 (lha) とは、ここではマイトレーヤ、マンジュシュリーのことであろう。

④ これ以降は『究竟一乘宝性論』の Dar ma rin chen の注釈 (大谷 No. 10148) の序論に同一の文章が見られる。(小川一乗教授の御教示による)

⑤ kṣaṇa (dal ba) とは仏法に適した好ましい境涯で、8種の不適当な境涯 (akṣaṇa) である八難、即ち(i)地獄(ii)餓鬼(iii)畜生(iv)長寿天(v)辺地(vi)根が完全でない(vii)世俗的な知恵や邪見に捕われる(viii)仏前仏後、を避けた境涯に生まれることである。これは阿舎に於いて既に見られるものである。次に、条件の円満 (sampad, 'byor pa) とは、『声聞地』によれば、自円満・他円満の二種であり、それぞれが五つある。自円満とは、善得人身、生於聖処、諸根無欠、勝処淨信、離諸業障であり、他円満とは、諸仏出世、説正法教、法教久住、法住隨轉、他所哀愍である。

(大正 30, 396b-c, Shukla ed., pp. 6-8) とところで、『入菩提行論 (Bodhicaryāvatāra)』(v. 1-4) では、「この好ましい境涯の円満 (kṣaṇasampad) は非常に得がたいものである。得られたときは人の目的を成就するものである。もしこのことに対して幸福であると考えないならば、どうして再びこの巡り合いがあるであろうか」と説かれている。この箇所に対する Prajñākaramati の注釈 *Bodhicaryāvatāra-panjikā* (*Buddhist Skt. Text*, No. 12, pp. 4-5) によれば、kṣaṇa-sampad を dvandva (好ましい境涯と条件の円満) ではなく gen. tatpuruṣa (好ましい境涯の円満) と解釈しているようである。

ただ、Prajñākaramati はこれの後に、「八難を避けることは得がたい、人の状態を獲得することは得がたい、好ましい境涯の円満という清浄は得がたい、仏陀の出世は得がたい、根が無欠であることは得がたい、仏法を聞くことは得がたい、……」という十種の項目を『華嚴經』(*Gaṇḍavyūha*, Suzuki & Izumi ed., p. 116) から引用している。

- ⑥ 無益な努力を示す喩えである。
- ⑦ いわゆるマイトレーヤ (弥勒) の五論書である。二つ分別論とは『中辺分別論』と『法性分別論』であり、二つの莊嚴論とは『大乘莊嚴論』と『現觀莊嚴論』である。以下にタルマリンチェンはこの五論書の性格を略述している。また、この五論書の伝承については、袴谷憲昭「チベットにおけるマイトレーヤ五法の軌跡」(山口瑞鳳監修『チベットの仏教と社会』所収, 1986) を参照のこと。
- ⑧ これは所取・能取として顕現する「虚妄分別 (abhūtaparikalpa)」のことである。
- ⑨ 『撰大乘論』と『阿毘達磨集論』である。
- ⑩ 該当する内容は『瑜伽論』「声聞地」に見い出せない。(チベットの伝承では『瑜伽論』はアサンガの著作とされている。)
- ⑪ 究竟一乗と微細な空性 (ston ñid phra mo) は、チベット仏教では、中観学派の基本的なテーゼである。
- ⑫ 般若經の、詳細とは『十万頌般若經』、中とは『二万五千頌般若經』、要約とは『八千頌般若經』である。『現觀莊嚴論』は本来は『二万五千頌般若經』に対する注釈であったが、ハリバドラ以後は『十万頌般若經』『八千頌般若經』にも対するものと考えられるようになる。プトン (『仏教史』ラサ版, Ya. 19b2-7) によれば、龍樹の『中論』などは『般若經』の顯了相としての意味を解説しており、他方『現觀莊嚴論』はその隱密相としての意味を解説しているといわれる。

『注釈、真龍莊嚴』の科文 (I-17偈に対応する部分まで)

[序論] *mtshan gyi don* [4b5, 6-6]

1. 題名の意味 (*mtshan gyi don*) [4b5, 6-6]

A. 実質 (*dnos*) [4b5, 6-7]

A-1. 題名を翻訳すること (*mtshan sgyur ba*) [4b6, 6-8]

- A-2. 題名を注釈すること (mtshan bśad pa) [4b6, 6-8]
- B. 付加 (shar byuñ) [5a4, 7-2]
  - B-1. 巻数 (bam po'i grañs) [5a5, 7-3]
  - B-2. 翻訳者の帰敬 ('gyur gyi phyag) [5a5, 7-4]
- 2. 本論の意味 (gshuñ gyi don) [5a6, 7-6]
  - A. 注釈の序論 (bśad pa la 'jug pa) [5a6, 7-8]
    - A-1. 帰敬を述べて注釈することを誓うこと (mchod par brjod ciñ bśad par dam bca' ba) [5b1, 7-10]
    - A-2. 注釈を著作するのにふさわしいことを証明すること ('grel pa rtsom rigs par sgrub pa) [6a3, 8-15]
      - A-2-1. 外的条件として善知識の優波提舍を有することを証明すること (py'i rkyen dge ba'i bśes gñen gyi man nag dañ ldan par sgrub pa) [6a4, 8-18]
        - A-2-1-1. アサンガのもの (slob dpon Thogs med) [6a5, 9-2]
        - A-2-1-2. ヴァスバンドゥのもの (dByig gñen) [6b2, 9-10]
        - A-2-1-3. アールヤ ヴィムクティセーナのもの ('Phags pa [Grol sde] [6b4, 9-17]
        - A-2-1-4. バダಂತ ヴィムクティセーナのもの (bTsun pa Grol sde) [7a1, 10-6]
      - A-2-2. 内的条件として論書の全ての意味を証得する智慧を持つことを証明すること (nañ gi rkyen bstan bcos kyi don mtha' dag rtogs pa'i śes rab dañ ldan par sgrub pa) [7a3, 10-12]
      - A-2-3. 注釈を著作するのにふさわしいこと ('grel pa rtsom pa rigs pa)
    - A-3. 慢心をなくして喜びが生じる理由 (kheñs skyuñ shiñ spro ba skye ba'i rgyu mtshan) [7a6, 10-19]
  - B. 注釈自体を叙述すること (bśad pa ñid dgod pa) [8a6, 12-16]
    - B-1. 帰敬 (mchod brjod) [8b1, 12-18]
      - B-1-1. 接続関係 (mtshams sbyar ba) [8b1, 12-19]
      - B-1-2. 根本偈 (rtsa ba) [9b3, 14-20]
        - B-1-2-1. 言葉の意味 (tshig don) [9b3, 15-1]
          - B-1-2-1-1. 称賛 (bstod pa) [9b3, 15-2]
            - B-1-2-1-1-1. 三智性の功德による称賛 (mkhyen gsum gyi yon tan gyi sgo nas bstod pa) [9b4, 15-3]
            - B-1-2-1-1-2. 四聖者の母となっていることによる称賛 ('phags bshi'i yum byed pas bstod pa) [10a3, 15-19]



- B-1-2-1-2. 帰敬 (phyag 'tshal ba) [10a4, 16-1]
- B-1-2-2. 論争による決択 (brgal lan gyis gtan la dbab pa) [10a4, 16-3]
- B-1-2-2-1. 順序が確定していること (go rims ñes pa) [10a5, 16-4]
- B-1-2-2-2. 数が確定していること (grañs ñes pa) [11a1, 17-10]
- B-1-2-2-3. 母と子の意味 (yum sras kyi don) [11a3, 17-15]
- B-1-2-2-4. 称賛の対象である三智を確認すること (bstod yul gyi mkhyen gsum ños bzuñ ba) [11a4, 17-17]
- B-1-3. 注釈本論 ('grel pa) [11a6, 18-6]
- B-1-3-1. 撰義 (bsdus pa'i don) [11b1, 18-7]
- B-1-3-2. 目的の意味 (dgos pa'i don) [11b2, 18-9]
- B-1-3-2-1. 詳しく説くこと (rgyas par bsad pa) [11b2, 18-10]
- B-1-3-2-1-1. 信の生じ方 (dad pa skye tshul) [11b2, 18-10]
- B-1-3-2-1-1-1. 鈍根の者の信の生じ方 (dbañ rdul dad pa skye tshul) [11b3, 18-13]
- B-1-3-2-1-1-2. 利根の者の信の生じ方 (dbañ rnon dad pa skye tshul) [11b4, 18-16]
- B-1-3-2-1-1-2-1. 否定対象の法を確認すること (dgag bya'i cho ños bzuñ ba) [13a1, 21-2]
- B-1-3-2-1-1-2-2. そ〔の否定対象の法〕を他の事物の上で否定する証因 (de gshi gshan gyi sten du 'gog pa'i gtan tshigs) [13a4, 21-11]
- B-1-3-2-1-1-2-2-1. 論証式を立てること (rtags dgod pa) [13a4, 21-12]
- B-1-3-2-1-1-2-2-2. 〔三つの〕あり方 (因の三相) の証明 (tshul bsgrub pa) [13a5, 21-15]
- B-1-3-2-1-1-2-2-2-1. 〔証因の〕主題所属性の証明 (phyogs chos bsgrub pa) [13a6, 21-16]
- B-1-3-2-1-1-2-2-2-1-1. 〔主題が〕諦としての一を離れることの証明 (bden pa'i gcig bral du bsgrub pa) [13a6, 21-17]
- B-1-3-2-1-1-2-2-2-1-2. 〔主題が〕諦としての多を離れることの証明 (bden pa'i du bral du bsgrub pa) [14a2, 22-20]
- B-1-3-2-1-1-2-2-2-2. 〔証因の〕遍充の証明 (khyab pa bsgrub pa) [14a3, 23-6]
- B-1-3-2-1-2. そ〔の信〕から目的を得ようとする願望が生じること (de las don gner gyi 'dun pa skye ba) [14b2, 23-19]
- B-1-3-2-1-3. そ〔の願望〕から〔実践に〕入り果を獲得する仕方 (de las

- shugs nas 'bras bu thob pa'i tshul) [14b4, 24-6]
- B-1-3-2-2. まとめ (don bsdu ba) [14b6, 24-12]
- B-1-3-2-3. 論難を断ずること (rtsod pa spañ ba) [15a1, 24-14]
- B-1-3-2-4. 言葉の意味 (tshig gi don) [15b5, 26-3]
- B-1-3-2-4-1. それぞれの功德によって賛嘆すること (yon tan so so'i sgo nas bstod pa) [15b5, 26-4]
- B-1-3-2-4-1-1. 事智 (gshi śes) [15b5, 26-4]
- B-1-3-2-4-1-2. 道智 (lam śes) [16a4, 27-1]
- B-1-3-2-4-1-3. 相智 (rnam mkhyen) [16a6, 27-5]
- B-1-3-2-4-2. 合わせて帰敬すること (bsdus te phyag 'tshal ba) [20b1, 34-15]
- B-2. 詳細なものを好む人に向けての説明 (rgyas pa la dad pa'i gañ zag la phyé ste bśad pa) [20b2, 34-17]
- B-2-1. [現観] 論の目的の意味 (bstan bcos kyi dgos pa'i don) [20b2, 34-18]
- B-2-1-1. 論を著作する目的がないという恐れをそれぞれに断じて、説かれるべきことがらである三智一般の設定を説明すること (bstan bcos brtsams pa dgos med kyi dogs pa so sor spañs nas brjod bya mkhyen gsum spyi'i rnam gshag bśad pa) [20b3, 35-2]
- B-2-1-1-1. 論難 (rtsod pa) [20b3, 35-2]
- B-2-1-1-2. 返答 (lan) [22b2, 38-11]
- B-2-1-1-2-1. 返答そのもの (lan dños) [22b3, 38-12]
- B-2-1-1-2-2. 能証の聖教を立てること (śes byed kyi luñ dgod) [23b1, 40-4]
- B-2-1-1-2-2-1. 要約の母 (『八千頌般若経』) の能証を立てること (yum bsdus pa'i śes byed dgod pa) [23b2, 40-6]
- B-2-1-1-2-2-1-1. 要約して説くこと (mdor bstan) [23b2, 40-7]
- B-2-1-1-2-2-1-2. 詳しく説明すること (rgyas bśad) [24b6, 42-13]
- B-2-1-1-2-2-1-2-1. 事智によって声聞・独覚の現観が撰せられる仕方 (gshi śes kyis ñan rañ gi mñon rtogs bsdus tshul) [24b6, 42-14]
- B-2-1-1-2-2-1-2-1-1. 問い (shu ba) [24b6, 42-14]
- B-2-1-1-2-2-1-2-1-2. 返答 (lan) [25a1, 42-16]
- B-2-1-1-2-2-1-2-2. 道智によって菩薩の現観が撰せられる仕方 (lam śes kyis byañ sems kyi mñon rtogs bsdus tshul) [25a4, 43-4]
- B-2-1-1-2-2-1-2-2-1. 問い (shu ba) [25a4, 43-5]

- B-2-1-1-2-2-1-2-2-2. 返答 (lan) [25a5, 43-7]
- B-2-1-1-2-2-1-2-2-2-1. 言葉の意味 (tshig don) [25a5, 43-8]
- B-2-1-1-2-2-1-2-2-2-2. [異論などを] くまなく吟味すること (mtha' dpyad pa) [26b4, 45-18]
- B-2-1-1-2-2-1-2-2-2-2-1. 一般と特殊の在り方を確認すること (spyir btañ dañ dmigs bsal gyi tshul nos bzuñ ba) [26b5, 45-21]
- B-2-1-1-2-2-1-2-2-2-2-2. 菩薩が声聞・独覺の断と証得を完全になすと言われた意味を説明すること (byañ chub sems dpas ñan rañ gi spañ rtogs rdsogs par bya bar gsuñs pa'i don bśad pa) [27a1, 46-6]
- B-2-1-1-2-2-1-2-2-2-2-3. 実際を確認してそれを現証する仕方を説明すること (yañ dag pa'i mtha' nos bzuñ nas te mñon du byed pa'i tshul bśad pa) [29a1, 49-12]
- B-2-1-1-2-2-1-2-2-3. 相智によって仏陀の現観が撰せられる仕方 (rnam mkhyen gyis sañs kyi mñon rtogs bsdus tshul) [30b4, 52-10]
- B-2-1-1-2-2-1-2-3-1. 問い (shu ba) [30b4, 52-11]
- B-2-1-1-2-2-1-2-3-2. 返答 (lan) [30b4, 52-11]
- B-2-1-1-2-2-2. 中の母 (『二万五千頌般若経』) の能証を立てること (yum bar ma'i śes byed dgod pa) [30b6, 52-15]
- B-2-1-1-2-2-3. 詳細 [の母] (『十万頌般若経』) の能証を参照すること (rgyas pa'i śes byed kha 'phan pa) [31a1, 52-19]
- B-2-1-1-2-3. 聖教の意味の説明 (luñ gi don bśad) [31a1, 52-21]
- B-2-1-1-2-4. まとめ (don bsdu ba) [31a6, 53-13]
- B-2-1-2. 経典との重複があるという過失を断じて, [論の] 目的があることを証明すること (mdo dañ zlos pa'i skyon spañs nas dgos pa yod par bsgrub pa) [31b1, 53-17]
- B-2-1-2-1. 疑問を設定してから, [本論の] 接続関係 [の説明] (dogs pa bkod nas mtshams sbyar ba) [31b2, 53-19]
- B-2-1-2-2. 根本偈 (rtsa ba) [32a5, 55-5]
- B-2-1-2-3. 注釈本論 (grel pa) [32b5, 55-21]
- B-2-1-2-3-1. 目的 (dgos pa) [32b5, 56-1]
- B-2-1-2-3-2. 目的的目的 (ñiñ dgos) [33a1, 56-6]
- B-2-1-2-3-3. 説かれるべきことから (brjod bya) [33b2, 57-6]
- B-2-2. 撰義 (bsdus don) [34a5, 58-13]
- B-2-2-1. 接続関係 (mtshams sbyar ba) [34a6, 58-15]

- B-2-2-2. 言葉を立てること (ñag ñe bar dgod pa) [34b3, 59-2]
- B-2-2-2-1. 体を要約して説くこと (lus mdor bstan pa) [34b3, 59-3]
- B-2-2-2-1-1. 所説と能説を要約して説くこと (bśad bya 'chad byed mdor bstan pa) [34b3, 59-3]
- B-2-2-2-1-1-1. 言葉の意味 (tshig don) [34b4, 59-4]
- B-2-2-2-1-1-2. [異論などを] くまなく吟味すること (mtha' dpyad pa) [34b5, 59-8]
- B-2-2-2-1-1-2-1. アーチャールヤ (ハリバドラ) の主張を立てること (slob dpon gyi bshed pa dgod pa) [34b5, 59-9]
- B-2-2-2-1-1-2-2. 他の人が誤って解釈するのを断じること (gshan gyis log par bśad pa dgag pa) [35b3, 60-18]
- B-2-2-2-1-2. 能説の数 ('chad byed kyi rkañ grañs) [36a6, 62-2]
- B-2-2-2-1-2-1. 道一般の確立 (lam spyi'i rnam gshag) [36a6, 62-3]
- B-2-2-2-1-2-1-1. 昔のアーチャールヤの考え方を立てること (slob dpon sna ma'i lugs dgod pa) [36b1, 62-5]
- B-2-2-2-1-2-1-2. その[考え方の] 正邪の吟味 (de 'thad mi 'thad dpyad pa) [37a3, 63-6]
- B-2-2-2-1-2-1-3. [著者] 自らの考え方 (rañ gi lugs) [38a6, 65-12]
- B-2-2-2-1-2-2. それぞれの自性を説くこと (so so'i ño bo bśad pa) [39b3, 67-13]
- B-2-2-2-1-2-2-1. 三智 (mkhyen pa gsum) [39b4, 67-14]
- B-2-2-2-1-2-2-1-1. 相智 (rnam mkhyen) [39b4, 67-14]
- B-2-2-2-1-2-2-1-2. 道智 (lam śes) [39b6, 68-2]
- B-2-2-2-1-2-2-1-3. 事智 (gshi śes) [40b1, 68-21]
- B-2-2-2-1-2-2-2. 四加行 (sbyor ba bshi) [40b3, 69-8]
- B-2-2-2-1-2-2-2-1. 相等覚加行 (rnam rdsogs sbyor ba) [40b3, 69-8]
- B-2-2-2-1-2-2-2-2. 頂加行 (rtse sbyor) [40b5, 69-13]
- B-2-2-2-1-2-2-2-3. 次第加行 (mthar gyis sbyor ba) [40b6, 69-17]
- B-2-2-2-1-2-2-2-4. 刹那加行 (skad cig sbyor) [41a2, 69-21]
- B-2-2-2-1-2-2-3. 法身 (chos kyi sku) [41a3, 70-3]
- B-2-2-2-2. 体を詳しく解説すること (lus rgyas par bśad pa) [42b4, 72-18]
- B-2-2-2-2-1. 三智の体の解説 (mkhyen pa gsum gyi lus bśad pa) [42b4, 72-20]
- B-2-2-2-2-1-1. 相智の体の解説 (rnam mkhyen gyi lus bśad pa) [42b5,

72-21]

- B-2-2-2-2-1-1-1. 十法の自性 (chos bcu'i ran bshin) [42b5, 73-1]
- B-2-2-2-2-1-1-1. 意欲を誓うこと (bsam pa dam bca') [42b6, 73-3]
- B-2-2-2-2-1-1-1-2. その目的を成就する方法を説く教誡 (de'i don sgrub pa'i thabs ston pa gdams ñag) [42b6, 73-6]
- B-2-2-2-2-1-1-1-3. 誓いの目的を成就する行 (dam bca'i don sgrub byed kyi sgrub pa) [43a2, 73-10]
- B-2-2-2-2-1-1-1-3-1. 空性を証得する修所成〔慧〕の行の最初を確認すること (ston ñid rtogs pa'i sgom byuñ gi sgrub pa thog ma ños bzuñ ba) [43a2, 73-10]
- B-2-2-2-2-1-1-1-3-2. 行一般を設定すること (sgrub spyi'i rnam gshag) [43a3, 73-14]
- B-2-2-2-2-1-1-1-3-2-1. 行の所依 (sgrub pa'i rten) [43a3, 73-15]
- B-2-2-2-2-1-1-1-3-2-2. 能依である行 (brten pa sgrub pa) [43a5, 73-19]
- B-2-2-2-2-1-1-1-3-2-2-1. 行の所縁 (sgrub pa'i dmigs pa) [43a5, 73-20]
- B-2-2-2-2-1-1-1-3-2-2-2. 行の目的とされるもの (所期) (ched du bya ba) [43a6, 74-1]
- B-2-2-2-2-1-1-1-3-2-2-3. 行の分類 (sgrub pa'i dbye ba) [43b1, 74-3]
- B-2-2-2-2-1-1-2. そ〔の十法〕によって相智を表す仕方 (des rnam mkhyen mtshon tshul) [43b4, 74-15]
- B-2-2-2-2-1-1-3. 〔十法の〕次第が決定されていること (go rims ñes pa) [44a1, 75-2]
- B-2-2-2-2-1-1-4. 〔簡潔な〕説明と〔詳細な〕解説の結合 (bstan bsád sbyor ba) [44a4, 75-9]
- B-2-2-2-2-1-2. 道智の体の解説 (lam śes kyi lus bsád pa) [44a4, 75-10]
- B-2-2-2-2-1-2-1. 十一法によって道智を表すこと (chos bcu geig gis lam śes mtshon pa) [44a4, 75-11]
- B-2-2-2-2-1-2-1-1. 道智の支分 (lam śes kyi yan lag) [44a5, 75-12]
- B-2-2-2-2-1-2-1-2. 支分を有した道智 (yan lag can gyi lam śes) [44a6, 75-17]
- B-2-2-2-2-1-2-1-2-1. 弟子である声聞の道を知る道智 (slob ma ñan

- thos kyi lam śes pa'i lam śes) [44a6, 75-17]
- B-2-2-2-2-1-2-1-2-2. 犀の道である独覚道を知る道智 (bse ru'i lam rañ sañs rgyas kyi lam śes pa'i lam śes) [44b1, 75-20]
- B-2-2-2-2-1-2-1-2-3. 菩薩の道智 (byañ chub sems dpa'i lam śes) [44b2, 76-2]
- B-2-2-2-2-1-2-1-2-3-1-. 大乘の見道 (theg pachen po'i mthon ba'i lam) [44b3, 76-3]
- B-2-2-2-2-1-2-1-2-3-2. [大乘の修道]
- B-2-2-2-2-1-2-1-2-3-2-1. 大乘の修道の行 (theg chen sgom lam gyi byed pa) [44b3, 76-5]
- B-2-2-2-2-1-2-1-2-3-2-2-1. 有漏の修道 (zag bcas sgom lam) [44b4, 76-6]
- B-2-2-2-2-1-2-1-2-3-2-2-1-1. 勝解修道 (mos pa sgom lam) [44b4, 76-7]
- B-2-2-2-2-1-2-1-2-3-2-2-1-2. 廻向作意である無上の修道 (bson ba yid la byed pa bla na med pa'i sgom lam) [44b6, 76-13]
- B-2-2-2-2-1-2-1-2-3-2-2-1-3. 随喜作意である無上の修道 (rjes su yi rañ ba yid la byed pa bla na med pa'i sgom lam) [45a1, 76-16]
- B-2-2-2-2-1-2-1-2-3-2-2-2. 無漏の修道 (zag med sgom lam) [45a2, 76-19]
- B-2-2-2-2-1-2-1-2-3-2-2-2-1. 行である修道 (sgrub pa sgom lam) [45a2, 76-19]
- B-2-2-2-2-1-2-1-2-3-2-2-2-2. 畢竟清浄という修道 (sin tu rnam par dag pa shes bya ba'i sgom lam) [45a3, 76-21]
- B-2-2-2-2-1-2-2. [簡潔な] 説明と [詳細な] 解説の結合 (bstan bśad sbyor ba) [45a4, 77-3]
- B-2-2-2-2-1-3. 事智の体の解説 (gshi śes kyi lus bśad pa) [45a6, 77-9]
- B-2-2-2-2-1-3-1. 事智を表わす法 (gshi śes mtshon byed kyi chos) [45a6, 77-10]
- B-2-2-2-2-1-3-1-1. 果である母に近い・遠い理由 ('bras yum la ñe riñ gi rgyu mtshan) [45b1, 77-12]
- B-2-2-2-2-1-3-1-2. その理由自体が証明されること (rgyu mtshan de ñid bsgrub pa) [45b5, 78-4]
- B-2-2-2-2-1-3-1-3. 所対治と能対治分の区別 (mi mthun pa dañ gñen

- po'i phyogs kyi dbye ba) [46a1, 78-11]
- B-2-2-2-2-1-3-1-4. 事智の加行 (gshi śes kyi sbyor ba) [46a5, 79-2]
- B-2-2-2-2-1-3-1-4-1. 事智の加行の區別 (gshi śes sbyor ba'i dbye ba) [46a5, 79-3]
- B-2-2-2-2-1-3-1-4-2. 把握の仕方 ('dsin stañs) [46b1, 79-7]
- B-2-2-2-2-1-3-1-4-3. 結果 ('bras bu) [46b1, 79-9]
- B-2-2-2-2-1-3-2. [簡潔な] 説明と [詳細な] 解説の結合 (bstan bśad sbyar ba) [47a1, 80-4]
- B-2-2-2-2-2. 四加行の体の解説 (sbyor ba bsh'i lus bśad pa) [47a2, 80-9]
- B-2-2-2-2-2-1. 自在になることの因と果 (dbañ du bya ba rgyu 'bras) [47a3, 80-10]
- B-2-2-2-2-2-1-1. 相等覚加行 (rnam rdsogs sbyor ba) [47a3, 80-10]
- B-2-2-2-2-2-1-1-1. [相等覚加行を] 表わす法 (mtshon byed kyi chos) [47a3, 80-11]
- B-2-2-2-2-2-1-1-1-1. 善根を積んだ所依に関する一般の設定 (dge rtsa gsog pa'i rten gyi dbañ du byas nas spyi'i rnam gshag) [47a4, 80-13]
- B-2-2-2-2-2-1-1-1-1-1. 道である般若波羅蜜の瑜伽行の修習の把握の仕方の區別 (lam śer phyin gyi rnal 'byor sgom pa'i 'dsin stans kyi dbye ba) [47a5, 80-16]
- B-2-2-2-2-2-1-1-1-1-2. 等至の加行 (mñam gshag gi sbyor ba) [47b1, 81-1]
- B-2-2-2-2-2-1-1-1-1-3. 加行を修習する者の過失と功德 (sbyor ba sgom pa'i skyon yon) [48a1, 81-19]
- B-2-2-2-2-2-1-1-1-1-4. 道を般若波羅蜜の瑜伽行として表わす定義 (lam śer phyin gyi rnal 'byor du mtshon pa'i mtshan ñid) [48a2, 81-21]
- B-2-2-2-2-2-1-1-1-2. 善根が異熟した所依に関して心相續に生じる順序を実際に説くこと (dge rtsa smin pa'i rten gyi dbañ du byas nas rgyud la skye pa'i rim pa dños su bstan pa) [48a3, 82-3]
- B-2-2-2-2-2-1-1-1-2-1. 加行が生じる階位 (sbyor ba skyes pa'i gnas skabs) [48a3, 82-5]
- B-2-2-2-2-2-1-1-1-2-2. 異熟の階位 (smin pa'i skabs) [48a4, 82-7]
- B-2-2-2-2-2-1-1-1-2-3. 所依の人 (rten gyi gañ zag) [48a4, 82-9]
- B-2-2-2-2-2-1-1-1-2-4. 人の修習の次第 (gañ zag gi sgom rim) [48a5, 82-12]

- B-2-2-2-2-2-1-1-1-2-4-1. 法身の印をつける有と寂靜が等しい加行  
(chos sku'i lag rjes 'jog byed srid dañ shi ba mñam pa ñid kyi sbyor ba)  
[48a6, 82-12]
- B-2-2-2-2-2-1-1-1-2-4-2. 無上の浄土の加行 (shin dag pa bla na  
med pa'i sbyor ba) [48a6, 82-14]
- B-2-2-2-2-2-1-1-1-2-4-3. 巧みな方便の加行 (thabs mkhas sbyor  
ba) [48b1, 82-17]
- B-2-2-2-2-2-1-1-2. [簡潔な] 説明と [詳細な] 解説の結合 (bstan bśad  
sbyar ba) [48b2, 82-19]
- B-2-2-2-2-2-1-2. 頂加行 (rtse sbyor) [48b3, 83-1]
- B-2-2-2-2-2-1-2-1-1. 加行道の頂加行 (sbyor lam rtse sbyor) [48b3,  
83-1]
- B-2-2-2-2-2-1-2-1-2. 見道の頂加行 (mthoñ lam rtse sbyor) [48b5,  
83-8]
- B-2-2-2-2-2-1-2-1-3. 修道の頂加行 (sgom pa she bya ba'i lam rtse  
sbyor) [48b5, 83-8]
- B-2-2-2-2-2-1-2-1-4. 無間三昧の頂加行 (bar chad med pa'i tiñ ñe  
'dsin gyi rtse sbyor) [49a1, 83-13]
- B-2-2-2-2-2-1-2-2. [簡潔な説明と詳細な解説の結合] [49a3, 83-18]
- B-2-2-2-2-2-2. 堅固になることの因と果 (brtan pa rgyu 'bras) [49a3,  
83-19]
- B-2-2-2-2-2-2-1. 次第 [加行] (mthar gyis) [49a3, 83-19]
- B-2-2-2-2-2-2-2. 一刹那加行 (skad cig sbyor) [49a4, 83-21]
- B-2-2-2-2-3. 法身の体の解説 (chos sku'i lus bśad pa) [50a2, 85-10]
- B-2-2-3. 要約して説明すること (bsdus te bśad pa) [50b2, 86-7]
- B-2-2-4. 詳しく注釈しない理由 (rgyas par ma bkrol ba'i rgyu mtshan)  
[50b5, 86-13]